

# 模倣と

新訂第2版

西洋に学んだ  
日本の近・現代建築  
彰国社

# 創造の

初田亨

# 空間史



日本の近・現代建築の流れを軸にした  
もうひとつの西洋建築史。  
模倣から創造へといける  
建築様式のダイナミズムをたどる。

## 序 西洋から日本の近・現代建築へ

現在の日本の建築に直接つながる流れを溯っていくと明治の建築にたどりつくが、明治の建築を調べていくと、西洋建築に行き当たる。その理由は、日本が開国し西洋の建築を受け入れはじめたとき、西洋の建築が、過去の建築を学ぶことによつて建築を創造する歴史主義の時代にあつたことによる。西洋の建築を導入することから出発した明治の建築家たちは、西洋の歴史的な様式建築の勉強からはじめなければならなかつた。その出発は西洋建築の模倣からはじまったが、やがて、模倣を経て創造が建築家の課題になつていく。

本書の構成を、日本の幕末・明治の建築からはじめ、西洋のギリシャ、ゴシック、ルネサンス建築と、日本と西洋とを交互に組み合わせた内容にしたのも、このような理由からである。私たちの先輩にあたる日本人建築家たちが、何を考え、何に悩みながら建築を創造してきたのか、その歩んできた道をできる限り忠実にたどることと考えてみたいと思つたからである。そのため、日本の近・現代建築と西洋の古代からの建築の流れ、さらに西洋の近代建築とが入り組んだものになるが、明治時代の日本人建築家の誕生からはじまり、日本の現代建築で終える日本の近・現代建築の流れを軸にして、そのあいだに、必要な西洋（欧米）の建築を挟み込んでいく方法をとっている。

また建築の流れを、できる限り創造および空間という視点からみつめていきたいとも考えた。西洋建築の流れのなかで、どのように建築をつくるのが問題にされてきたか、またその流れのなかからいかにして近代建築が生まれ得たのか、などを考えようとしたのである。建築家たちが過去の建築を否定したとき、その根拠としたものは何だったのか、何を手がかりにして新しい建築をつくつていったのかなども考えている。

空間という概念が大切にされるようになっていったのも、まさに近代という時代のなかにおいてであった。

新しい建築がつくられていくとき、建築家の思考に大きな影響を与えてきたものに社会の変化がある。近代建築の誕生に、産業革命の結果生まれた都市住民、中間層の人々を欠くことはできない。新しい建築がくられていく背景に、このような社会の変化があり、その変化のなかで建築家の考え方もかわってきたのである。近代建築の誕生に、鉄やガラスなど新しい建築材料が与えた影響も大きかったが、何よりも大切なことは、建築家自身の建築に対する考え方がかわることであった。建築家の考え方がかわることによって、新しい建築が生み出されてきたのである。そして、その建築家の新しい考え方も、古い社会のなかでつくられてきたのであって、まったく新しい考えのもとに出発したものではない、ということも考えたかった。その意味では、どんなに新しい考え方であっても、それぞれの時代的限界をもっているともいえる。

日本にも、中間層と呼べるような人々が生まれ、時代をリードするようになった明治末期から大正時代にかけて、明治前期に受け入れた歴史主義の建築とは違う、近代主義（モダニズム）の建築がつけられていった。しかし、遅れて近代を歩みはじめた日本では、近代を受け入れる社会的条件が西洋とは異なる。このことは結果的に、日本の近代建築が、西洋の近代建築とは異なるものにならざるを得なかったことをも示している。そして、この点にこそ、日本独自の近代建築が作り出される可能性もあったのである。

日本の建築家が創造を問題にしたとき、「日本的なるもの」にぶつからざるを得なかったのも、このような理由によるところが大きい。模倣の時代を終えて建築の創造を考えはじめたとき、建築家たちは、自分たちの歩んできた道を、そして自分自身の立っている地点や場所を考えざるを得なかったのである。「日本的なるもの」への問いかけ方は、それぞれの時代で異なるが、日本に近代建築がつけられていく過程で、くり返し問題にされてきたテーマでもある。

三つのオーダー 41

3 古代ローマ建築と建築技術の発展 44

都市と建築 44

コンクリートでつくった巨大建築 46

アーチ構造の建物をオーダーで飾る 48

4 初期キリスト教の建築 50

バシリカを教会堂として使用 50

内部が豊かなビザンチン建築 52

四角形の平面にドームをのせる 53

5 中世の教会建築 57

重厚・素朴なロマネスク建築 57

都市につくられたゴシック建築 61

三つの要素 62

垂直性の強い空間をつくる 63

6 古代を再生したルネサンス建築 69

行動の規範を古代に学ぶ 69

フィレンツェで開花 72

透視画法(遠近法)の応用 76

盛期ルネサンス 79

三層構成のバラツツォ 81

7 ルネサンスからバロックへ 84

規範を崩すマニエリスム 84

アンドレア・パラディオ 85

I 西洋建築を受容した日本

1 西洋建築の導入―棟梁・職人たちの時代 10

幕府と延藩の工場建設と明治政府の宮繕 10

お雇い外国人 11

棟梁・職人の文明開化 12

棟梁・職人から請負業へ 15

2 様式建築を学んだ明治の建築家 16

日本人建築家の誕生 16

模倣から出発 17

3 「国民的様式」の追求 22

和風建築をつくる 22

議院建築の建設と新しい課題 24

将来の建築様式をいかにすべきか 26

客観的にみはじめた建築様式 27

客観的にみはじめた建築様式 27

II 西洋における建築の変遷

1 石と煉瓦の建築 32

まぐさとアーチの構造 32

ピラミッドと古代エジプト建築 33

2 古典主義建築の源流になった古代ギリシャ建築 38

木構造の形式をもった石造神殿 38

プオナロッティ・ミケランジェロ 88

サン・ピエトロ大聖堂 90

8 情動性と壮麗さを求めたバロック建築 93

集中性や動きをもつ空間 93

情動的な空間をつくる 94

華麗なバロック建築 96

貴族のサロンがつくったロココ建築 100

西洋建築の流れをたどる 101

III 近代への挑戦

1 近代的考え方の育成 104

新古典主義建築 104

ギリシャ様式の復興(フリークリバイバル) 105

建築の原型・原理を求めて 107

ゴシック様式の復興(ゴシックリバイバル) 110

歴史主義の建築 112

2 一九世紀の試行 114

芸術・建築の価値観をかえたアーツ・アンド・クラフツ運動 114

ウィリアム・モリスとモリス商会 115

歴史的様式によらないアール・ヌーヴオー 118

都市住民・中間層の人々のデザイン 121

3 産業の発達と建築 123

新しい建築材料の使用 123

万国博覧会の施設およびシカゴ派の建築 127

4 機械の肯定と美の追求 130

大きな影響を日本に与えたセセッション 130

オットー・ヴァーグナーとアドルフ・ロース 132

機械を肯定したドイツ工作連盟 135

近代技術が可能にしたデザイン 137

IV 日本の近代建築運動

1 新しい建築の影響 142

様式建築の細部にセセッション 142

個人的趣味の発達が新しい様式をつくる 143

自己の拡充から出発 145

分離派建築会 147

表現主義の影響 148

2 モダニズム建築の登場 151

合理性の追求 151

構造家の果たした役割 154

合理主義と伝統建築 155

V モダニズム建築

1 モダニズム建築へ収斂 160

パウハウスの設立 160

開放的システムの設計 161

ミース・ファン・デル・ローエ 163

ル・コルビュジエ 166

|  |                   |
|--|-------------------|
| CIAMを結成する  | 169               |
| 2 モダニズム建築が獲得したものの<br>インターナショナル・スタイルに収斂<br>一九一〇年代から二〇年代にかけて<br>フランク・ロイド・ライト | 172<br>173<br>178 |
| 新しいイメージを求めて<br>機械としてみた建築   | 180<br>181        |
| VI 日本におけるモダニズム建築の定着、そして懷疑へ   |                   |
| 1 小住宅から出発  | 184               |
| 機能的な住宅の追求<br>「新日本調」と呼ばれた建築<br>さまざまな作風の表現                                   | 184<br>185<br>187 |
| 2 モダニズム建築の定着   | 190               |
| グロピウスとコルビュジエの弟子たち<br>レーモンドの影響  | 190<br>193        |
| 戦後をリードした建築家  | 195               |
| 3 現実社会の問題から見い出すテーマ<br>戦後に活躍しはじめた世代<br>丹下健二                                 | 199<br>199<br>200 |
| 伝統への視座   | 203               |
| 4 都市への視点   | 206               |
| アーバン・デザインへの意識<br>「開かれた空間」をつくる  | 206<br>208        |

|  |  |
|--|--|
| メタポリズムの結成<br>夢に終わった未来都市  | 210<br>213                             |
| 5 モダニズム建築を超えて<br>見い出せない主題<br>ポスト・モダニズム<br>磯崎新  | 218<br>218<br>219<br>222               |
| 多様なテーマの展開<br>モダニズム建築を乗り越える動き   | 230<br>235                             |
| 6 個性的な都市空間を求めて<br>建築の保存と再生<br>まちづくりと歴史的建築物<br>都市の個性を育てる<br>歴史を生かしたまちづくり<br>問い返される場所性 | 235<br>235<br>241<br>241<br>242<br>243 |
| 建築史年表  | 245                                    |
| あとがき   | 260                                    |

装丁◆早瀬芳文  
装画◆内山良治

I ◆西洋建築を受容した日本

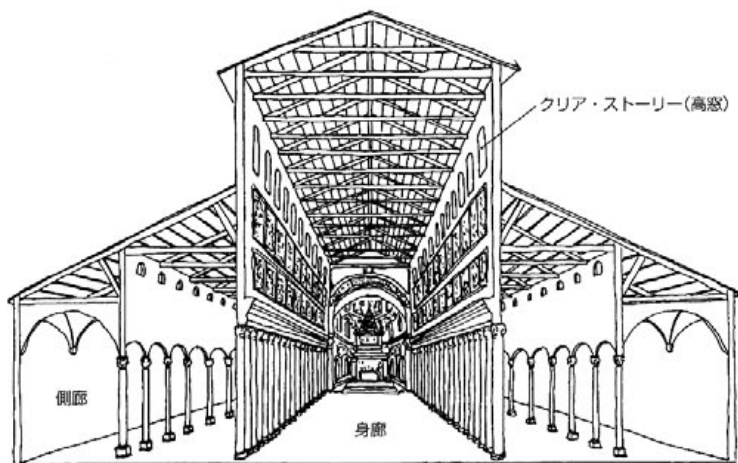
## 4 初期キリスト教の建築

バシリカを教会堂として使用

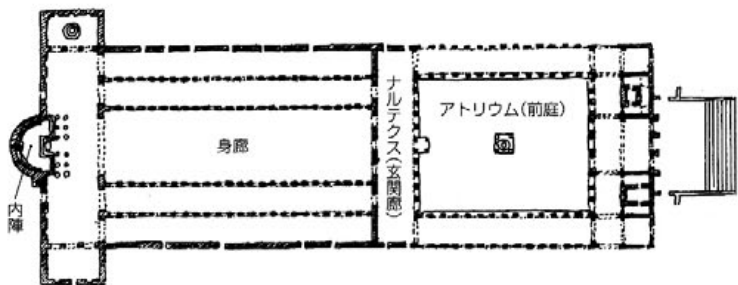
三一三年にローマ皇帝からキリスト教が公認されて以降、キリスト教の教会堂が公に建設されるようになった。教会堂として最初に用いられたのは、古代ローマの都市に建てられていたバシリカであった。バシリカは多くの人が集まることのできる内部空間をもっており、キリスト教の儀式を行うのに都合がよい施設でもあった。また、アプスは祭壇として使用された。以後、バシリカという用語は教会堂を指す言葉として定着していったのである。

古代ローマのバシリカの多くは長方形の平面をもち、長辺の側を広場に向けて開け、入り口としていた。内部には柱の列が立ち並び、天井の高い中央部のまわりに天井を低くした回廊や部屋が並んでいる。また、中央部と回廊部分の天井高の違いから生まれる壁面上部にはクリア・ストーリー（高窓）が付けられている。

バシリカを教会堂として使うようになったときの大きな変化は、長方形の短辺の側に入り口を設けたことである。これによって、同じ建物でありながら人間が建物内部に入ってしまったとき、空間に方向性を感じさせる動きをも



4世紀に建設されたサン・ピエトロ断面図【バシリカ】



4世紀に建設されたサン・ピエトロ平面図



サンタ・マリア・マッジョーレ教会 [440年] 祭壇部のアーチとエンタブレチュアのモザイクは当初のもの。身廊の天井は15世紀末に付加された。

\*3 古代ローマのバシリカについては四五頁を参照。

## 4 機械の肯定と美の追求

大きな影響を日本に与えたセセッション

一八九七年、いっさいの過去様式から分離することをとえて、一九人の若い芸術家が集まりセセッション（ウィーン分離派）を結成している。初代会長は画家のグスタフ・クリムト（一八六二〜一九一八）で、建築家ではヨーゼフ・マリア・オルブリヒ（一八六七〜一九〇八）とヨーゼフ・ホフマン（一八七〇〜一九五六）が参加している。

翌年にはその運動拠点になる展示館・セセッション館（分離派館、ウィーン、一八九八年）が、オルブリヒの設計によって完成している。セセッション館は、左右対称の単純でマッシヴな形態をもった当時の斬新なデザインで、入り口上部には、「時代にその芸術を、芸術にその自由を」と記されている。また、ホフマンの代表的な作品にはストックレー邸（ブリュッセル、一九〇一年）がある。ストックレー邸には、直線で縁取りした内外壁や、小さな正方形を組み合わせた外観窓枠、ほっそりした角柱を林立させた室内デザインなどがみられる。

なお、グラスゴー美術学校（二九〇九年、第一期は一八九九年）の設計者、



セセッション館【分離派館、1898年】



郵便貯金局【ウィーン、1906年】外観（左）と室内ホール（下）。室内ホールは、入り口に設けられた階段を上ったところに位置する。室内ホールの上部は光庭になっている。



ストックレー邸【一九〇一年】

## 2 モダニズム建築の定着

### グロピウスとコルビュジエの弟子たち

一九二〇年代から三〇年代にかけて、ワルター・グロピウスのパウハウスやル・コルビュジエに注目する若い建築家が増えていった。

グロピウスおよびパウハウスで学んだ人々には、山口文象や山脇巖（一八九八〜一九八七）がいる。山口文象は一九二九（昭和四）年にパウハウスの校長を辞めていたワルター・グロピウスの事務所に入り、山脇巖は、一九三〇（昭和五）年にパウハウスに入学している。コルビュジエのもとに走った建築家には、前川国男（一九〇五〜八六）や坂倉準三（一九〇一〜六九）がいる。前川は一九二八（昭和三）年に、坂倉は一九三一（昭和六）年にコルビュジエの事務所で働いている。

戦前の彼らの作品はそれほど多くない。山口文象は、日本歯科医学専門学校付属病院（東京、一九三四年）や日本電力黒部第二号発電所（下新川、一九三六年）などの設計をしている。また、前川国男は岸記念体育会館（東京、一九四一年）を、坂倉準三はパリ万国博覧会の日本館（パリ、一九三七年）をつくっている。坂倉の日本館は、鉄骨を用いて木造の日本家屋を表現した



岸記念体育会館（一九四一年）



日本歯科医学専門学校  
付属病院[1934年] ドイツから帰国した山口文象が最初に設計した作品。



日本電力黒部第二号  
発電所 [1936年]



パリ万国博覧会日本館  
[1937年] 開放的な空間が建物とそのまわりの庭を調和させている。